
 紹 介

ポール・クラヴァル「経済学者、社会学者と地域研究」(Paul Claval, "Les Économistes, Les Sociologues et Les Études Régionales. Bibliographie analytique", *Région et Régionalisation*, Paris : Dalloz, 1967.)

石 原 照 敏

フランスの経済学者による地域研究については、Perroux や Boudeville の地域理論⁽¹⁾など、若干の研究しかわが国には紹介されていないし、フランスの社会学者による最近の地域研究については、わが国にはほとんど紹介されていないように思われる。さらに、最近フランス以外の諸国においても注目されている Perroux の地域理論が、フランスにおいてさえも称賛ばかりされているのではなく、すでに批判の俎上にのせられていることなど、一般にフランスの経済学者による地域研究が、フランスの学界においていかに評価されているのかということについては、わが国ではほとんど知られていない。こういう現状であるから、フランスの経済学者および社会学者による地域研究の現状を的確に把握していると思われるクラヴァルの上記論文の要点を抄録風に紹介することも決して無意味ではないであろう。なお、クラヴァルは経済学にも造詣の深いフランスの地理学者であった、現在パリ大学(ソルボンヌ)の地理学講師(この論文を執筆した当時は、ブザンソン

- (1) 筆者は次の論文を紹介したことがある。François Perroux, "La firme motrice dans une région et la région motrice", *Cahiers de L'Institut de Science Économique Appliquée*, Série AD, No1, I.S.E.A, Paris, 1961, pp. 11—67. 石原照敏(紹介), 地域における主動企業と主動地域, 経済地理学の諸問題 2, 経済地理学会, 1966, pp. 1—12.
- Jacques-R. Boudeville, "Hiérarchie urbaine et aménagement des villes," Joseph Lajugie, *Développement Économique Régional et Aménagement du Territoire*, Numéro spécial de la Revue d'Économie Politique, Paris : Sirey, 1964, pp. 65—92. 石原照敏(紹介), 都市における地域経済開発の基礎理論—都市階層と分極地域, 経済地理学の諸問題 1, 経済地理学会 1965, pp. 9—19.

大学文学・人文科学部講師)である。

長い間、歴史学者と地理学者だけが地域の实在性(réalités)に関心を抱いていた。経済学(Économie politique)は、国際貿易の場合においてしか空間問題に関心を抱いてはいなかった。フランスの経済学においては、他の国の場合よりも空間研究は無視されていた。

Brocard (Lucien Brocard, Principes d'économie nationale et internationale, 3 Volumes, Paris, 1929—31.) は、フランスでは最初に経済学の中に空間分析を統合しようとし、経済学者にとって地域的实在性 (réalité régionale) とは本質的に経済的諸関係の相互依存(とりわけ、市場の役割)の实在性であることを示した。

このようなパイオニア的な著作は、不幸にして、戦前ほとんど人の目につかないままに見過ごされてしまった。1940年代の中頃から50年代の中頃にかけて、ドイツの立地論がフランスに紹介された。

Dechesne (Laurent Dechesne, Économie géographique : principes de géographie économique, Paris, 1944.) は、ウェーバー理論を紹介したし、Ponsard (Claude Ponsard, Économie et Espace, Paris, 1955.) は、レッシュ理論を紹介した。

1950年代の中頃になると、地域経済 (économies régionales) の記述が行われるようになってくる。Gendarme (René Gendarme, La région du Nord. Essai d'analyse économique, Paris, 1954.) は、フランスの北部地域を研究対象として立地均衡と立地発展史を強調したし、Bauchet (Pierre Bauchet, Les tableaux économiques ; Analyse de la région lorraine, Paris, 1955.) は、Isard の地域分析技術を援用しながら、ロレーヌ地域の経済の量的記述を行った。また、Rullière (Gilbert Rullière, Localisations et rythmes de l'activité agricole, Paris, 1956.) は、同質地域の形成を明確にしようとした。

やがて、地域の考察が本質的に進歩するにいたる。フランス学派の考察はこの領域におけるアメリカの学者の考察を完全なものにし、豊かにしている。アメリカの地理学者、Whittlesey グループの論文より先に、Perroux (François Perroux, Les espaces économiques, Économie appliquée, 1950) は、具体空間とは異なる抽象空間の概念を提起している。Boudeville は、Perroux と Whittlesey との2つの思考の流れの統合を試み、いかにして、同質地域が一般的に具体空間の分析に属しているか、機能地域が抽象経済空間の水準に位置づけられるか、さらに、機能地域が第3次機能をもった中心的な場所

の周囲にグループをなすように、いかに配置されているかを示している。この場合に経済地域は都市の影響地帯と同一視されている。その後、Boudeville (J-R. Boudeville, *Problems of regional economic planning*. Edinburgh at the university press, 1966.) は、経済空間と経済地域の相違を明確にし、経済地域は連続し、一地方に局限された area であるとした(その後、以下……筆者)。

地域研究の増加は、一般に利害関係のない興味に由来しているのではない。フランスの研究は行動の要求から生まれている。地域整備を政府の政策の目標の1つにするように導いた世論の動きの中で、経済学者はきわめて地味な役割を演じた。最も注目すべき態度をとったのは地理学者および都市学者であった。

地域行動政策は、それが策定された1955年以来経済学者の注意をひきつけた。最初、経済学者にとって問題になったのは、地域行動政策はいかなる施策手段によれば有効であるのかということであった。地域介入政策は第2次大戦前後、他の国、特にイギリスで考えられた施策を模倣していた。1955年と1960年の間に若干の経済学者、Jeanneney, Milhau, Lajugie, Byé, などが地域整備政策によって提起された問題を分析した。この中で、とりわけ, Maurice Byé (Maurice Byé, *Les moyens d'une politique des économies régionales. Rapport de la Commission des Économies Régionales. Avis et Rapports du Conseil Économique*, 1957, pp. 445—471.) は、地域整備政策の基礎を経済学的観点から分析し、努力を分散させないことおよび空しい総花政策を行わないことが必要であると結論した。

政策の有効性を判断するために、経済学者は地域経済とは何であり、経済地域とは何であるかを分析するようになりたてられた。それ故、地域に関する省察の本質はもともと経済学者にとっては外的な運動から生じているとみられる。経済学者は一世紀の自由主義の伝統と縁をたち切った1つの政策に判決を下さねばならないとき、十分に余裕を与えられてはいなかったのである。彼等は施策の有効性の基準を探した。その結果求められた1つの原理は、若干のセンターや諸点においてのみ重要なオペレーションにとりかかることであった。この原理の基礎には、空間領域におけるフランス経済思想のもっともよく知られた局面の1つをあらわすところの地域分極化 (Polarisation régionale) と、分極化された成長 (Croissance polarisée) の理論が横たわっている。

Lucien Brocard の説には、この発展の不均等性を意識していたことを示す表現がみつげられる。彼は成長の諸現象の空間的集積についてよりも複合した発展について力説して

いるが、1950年代において体系的に開拓されるであろう思想の芽がそこに存在しているのである。分極化された地域成長 (Croissance régionale polarisée) の理論は、François Perroux (François Perroux, Note sur la notion de pôle de croissance, *Économie appliquée*, 1955, p.307. François Perroux, *La firme motrice dans une région et la région motrice*. Cahiers de l'Institut de science économique appliquée, Série AD. No1. I.S.E.A, Paris 1961, pp.11—67.)と彼の周囲で研究に従事している経済学者によって定式化されたものであり、意志空間 (espace volontaire) の分析が明らかにする支配・不均斉の諸関係を強調していた、経済空間の諸タイプの分析の中にすでにこの定式の芽生えがあった。成長の極の概念は近代経済における成長率の極端な不均等性を率直に検証することおよびその現象の説明的なシューマを暗示することを可能ならしめるものである。分極作用の動因であるところの主動企業 (firme motrice) の行動を通して、経済地域とその成長に関するすべての理論が明示されるのがみられる。

多数の経済学者は一定の出発点から分極化の効果が作用し、介入政策によって起動し始めた成長が自然に続行するように、若干の諸点に行動を集中する政策を称賛している。しかしながら最近の若干の研究は、分極化された成長の理論がダイナミックな地域経済の複雑さのすべてを真に吸みつくしているのかどうか、また現実の状況が理論状況から遊離していないのかどうかを自問することを可能にするものである。Goetz-Gireey (R.Goetz-Girey, *Stimulant et propagation de la croissance dans le pays de Montbéliard*, *Revue économique*, 1960, pp.1—16) は、分極化された成長の理論をもち揚げながらも主動企業が経済の多様化 (上流・下流の諸活動の発展) をひきおこすどころか、その地方における多くの他部門諸企業の消滅を余儀なくしたとしてこの理論に反駁を試みたのである。

Flamant (Maurice Flamant, *Concept et usage des économies externes, Développement économique régional et aménagement du territoire*, Numéro spécial de la *Revue d'Économie Politique*, 1964, pp.93—110.) は、Scitovsky の論文を引用しながら、多くの工業企業や商業企業の空間的再集団化における外部経済の役割を分析し分極化は外部経済の働きに基づくものと考えた。

社会学者は最近年まで奇妙にも空間問題に無関心なままにとどまっていた。その結果社会学の連続した流れの歴史をたどることは不可能である。フランスにおいて最初に大きな

メトロポールを分析したのが社会形態学者であるだけに、この事態は益々逆説的である。距離の研究は地域の段階における心理学的、社会学的実在性の研究と同様に、1950年以前にはフランスの社会学者の注意をひかなかった。

都市社会の分析に関する経験的な著作——Charles Bettelheim と Suzanne Frère によって実現された Auxerre の研究 (Charles Bettelheim, Suzanne Frère, Une Ville française moyenne: Auxerre en 1950. Étude de structure sociale et urbaine, Cahiers de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, Paris, 1950)——は、フランスにおける研究の新しい流れの始まりを示している。これは、小地域単位に関係のある社会問題の具体的分析の最初の試みである。もっとも興味のある研究は、大都市空間における社会的にミクロな単位の現存を強調している、P.H. Chombart de Lauwe (Chombart de Lauwe, Essais de sociologie, 1952—1964, Coll. L'évolution de la vie sociale, Paris, 1965, p.197)のグループによって実現された研究である、このような研究は quartier あるいは、agglomération の段階において起こるところのものをよりよく理解することを可能にしている。これらの研究は来たるべき年における地域的実在性の研究への社会学の寄与が何でありうるであろうかを予測させるものである。